

## 会議録

会議名	山形市総合教育会議
開催日時	令和6年8月6日(火) 10:00~11:30
開催場所	山形市役所3階 庁議室
出席者	佐藤孝弘市長、金沢智也教育長、 田中克教育委員、中村篤教育委員、細谷真紀子教育委員、 伊藤洋子教育委員
(事務局)	高橋一実教育部長、横山尚久学校教育課長、 地主佳子商業高等学校長、志済直史商業高等学校事務長、 西村尚人教育企画課長
報告・協議事項	報告事項 山形市の児童・生徒の現況について 協議事項 商業高校の教育の一層の充実をめざして

### 会議経過

**1 開会** (西村教育企画課長)

**2 挨拶** 佐藤市長・金沢教育長

**3 報告** (座長 佐藤市長)

「山形市の児童・生徒の現況について」

資料を用い、横山学校教育課長より説明。

〈 質疑応答 なし 〉

**4 協議** (座長 佐藤市長)

「商業高校の教育の一層の充実をめざして」

資料を用い、地主商業高等学校長より説明。

## <意見交換>

### 【佐藤市長】

それでは、本日の協議事項についてご意見をいただきたい。

まず、私から意見を述べさせていただく。スマートスクールを進めていくうえで、地域の企業や様々な主体と連携しながら学んでいくことが、今後ますます重要になってくると思う。商業高校に限った課題ではないが、山形市で生まれ育った子どもたちが、あまり地元企業のことを知らずに県外へ就職してしまうケースが多い。市としては、山形市の将来の経済を担う人材を輩出することを強く望んでいる。県外就職による地元離れの解決に向け、様々な学習の中で地元との繋がりをつくり、山形の企業について理解を深めていくことが非常に大切だと思う。特に商業高校の場合、実践的な教育をしているため、大いに期待している。すでに AI 部や産業調査部のように、かなり地域と連携した学習を進めている部分もあるが、ますます充実したものにしてほしい。

このような機会に、ぜひ委員の皆様からもご意見を賜りたい。

### 【田中委員】

毎年、入学希望者が多く、中学生にとって魅力ある高校になっていると思う。「日本一の商業高校」を目指した特色ある教育活動について、魅力を五つ挙げる。

一つ目は、PFI 導入による先進的な校舎である。輸誠ホールや食堂、冷暖房完備の広い体育館、様々な特色ある特別教室、IT 設備などハード面がかなり充実している。

二つ目は、学習指導である。単位制導入によって、選択幅の多いカリキュラムや少人数授業、チーム・ティーチングが充実してきている。また、各種検定資格試験においても好成績を上げている。さらに、IT 環境を活用し、大学と連携した遠隔授業も実施されており、これから社会で必要とされる知識・技能を身に付ける指導がなされている。

三つ目は、卒業後の進路である。進学者が 78%、特に 4 年生大学への進学者が半数以上であり、国立大をはじめ有名私立大への進学実績を残している。その一方、県内管内就職のニーズに応じた進路指導も実施されており、地元山形の未来を担う、子どもたちの育成に繋がっていると思う。

四つ目は、スポーツ・文化活動である。インターハイ・東北大会での数多くの優勝・入賞をはじめ、運動部の活躍が目立つ。今年は、野球部が甲子園予選でベスト 4 となり、公立高校として健闘していると思う。また、産業調査部をはじめ、文化部も充実した活動がなされていると思う。

五つ目は、山形市との関わりである。産業調査部の市とコラボした山形市のまちづくりに関する取り組みをはじめ、やまがた AI 部への参加など山形市と関わ

りを持った活動を展開している。また、学校運営協議会・同窓会の支援協力を踏まえた、産業界との連携も探っている。

次に、商業高校に期待することを三つ挙げる。

一つ目は、教職員についてである。先生方も進取の精神を持ち、研修等に励んでほしい。また、学校の活性化のために、県立高校との人事交流も重要だと思う。

二つ目は、大学進学についてである。来年1月の大学入学共通テストから簿記が除外されることを受け、共通テスト受験者にとっては状況が厳しくなると思う。商業高校の強みである、情報・英語の強化も進めてほしい。また、一般入試での大学合格者が半数になるほど、大学入試は多様化している。自己推薦・AO入試等を考えると、総合的な探究の時間の充実が必要だと思う。産業調査部をはじめとした商業高校のノウハウを生かし、生徒の大学進学に繋げてほしい。

三つ目は、地域に愛される商業高校になることである。現在も行われている高校生ボランティアや市と連携した文化部の活動のみならず、商業高校の人脈を活用した市内県内の産業界との連携を図り、山形に愛着のある人材を数多く育成してほしい。更には、山形大学の合格者が毎年数名輩出するような学校を目指してほしい。

加えて、商業高校へ提案したいものが二つある。

一つは、現在の学科制度についてである。経済科、情報科とも特色あるカリキュラムで魅力的に感じるが、総合ビジネス科と違い定員が少ない(40名、80名)こともあり、年によって志望倍率が大きく上下する。商業高校は選択科目が多様であることを踏まえると、入学時に科を分けた選抜をするのではなく、2年生進級時に科を選択するようなことも一案と考える。

二つ目は、制服についてである。商業高校の伝統ある制服は、生徒にとって愛着があり、多くの女子中学生の憧れである一方、性的マイノリティへの配慮から制服のあり方を考える必要があると思う。制服選択制を検討することも一案と考える。

### 【中村委員】

今回のテーマである「商業高校の一層の充実をめざして」について論じる前に、これから予想される社会の変化について考える。

一つ目の変化は、少子高齢化によって生産年齢人口が減少することを受け、より若者の力が求められる時代が来ることである。

二つ目の変化は、デジタル社会の進展に伴い、より一層テレワークが増えることである。

三つ目の変化は、国際化の進展により、英語を中心としたコミュニケーションの必要性が高まることである。

四つ目の変化は、国家・世界レベルで今後解決すべき課題が増えることにより、先の読めない時代に対応できる力が求められることである。

このような社会変化に向けて、商業高校としては特に「四つの言語」を基本としたビジネス教育に着目したい。

「四つの言語」とは、「会計言語」(=財務諸表の作成と分析をする知識・技術の習得)、「コンピューター言語」(=ICT機器をビジネス分野で活用できる知識・技術の習得)、「国際言語」(=国際化に対応できる英会話・英語力の習得)、「コミュニケーション言語」(=自己表現、伝達力の習得)である。このような学びを生徒自らが探究することによって、これからの中の社会で「生きる力」を身に付けてほしい。

次に、学校として今後の取組の中で注目すべきことは、高校の「入口」と「出口」であると思う。

「入口」という面では、少子化の進行に伴い、志願者数が減少していくことも予想される。オープンキャンパスや学校説明会、学校PRのHP作成、出前授業、部活動によるスポーツ教室など、小学校や中学校との連携を更に充実させることで商業高校をPRし、志願者を増やしていくことが非常に重要だと思う。

高校の卒業という「出口」においては、今後更なる産業界との連携、専門学校・大学といった高等教育機関との連携を一層広げていくことが大切だと考える。また、現在の高校3年生は非常に進路が多様化していることもあり、生徒に対するきめ細やかな進路指導も大切になると思う。

最後に、非常に先行した考え方ではあるが、昨今、全国的に中高一貫校が台頭してきていていることを踏まえると、商業高校においても、将来的に中高一貫教育を検討する時が来るのではないかと考える。

山形市立商業高等学校には、商業高校としての揺るぎないスクールポリシー、最新の設備や環境、伝統校ならではのOB・同窓会の力強い組織力、そして地元山形市のバックアップといった、他校にはない強みがあると思うので、ますますの発展、進化を期待している。

### 【細谷委員】

商業の役割は、生産と消費者を互いの利を持って繋ぐことにあると考えるが、社会の中にある多様な業種や学びの中でIT化が進んでおり、よりICTが身近になる中、生産者が直接消費者に結び付く仕組みや行政との結びつきなど、工業や農業分野などでも多様な商業が展開されている。

また、探究などを通じて普通科であってもビジネス課題に取り組む高校が増えている中で、より商業高校として、商業の強みを活かしていく必要性があると感じている。

そのような環境の中で、未来の商業を担う人材育成を行う高等学校として、より特色を持ち、地域の商業人として山形市に貢献する人材を育成することが期待される。検定等の実践的なスキルを身につけるだけではなく、モノ・カネ以外のヒトを見つめる視点の熟成も重要な要素となると考える。特に3年生時に多様な選択科目を持つ中で、1・2年生のうちにこうした視点の熟成を、検定スケジュールや部活動、学校活動と並行して行われることが重要と考える。

例えば、マーケティングや接客のスキルにおいて、相手となるヒトの背景を見る力や、そのヒトと連携することを考える力など、商業人としての精神を熟成することは、目的意識を持って大学に進学することの大切さや、引く手あまたな就職市場のなか職業を選択するうえで、消費・使い捨てされる人材ではなく、社会を支える存在になっていくために、身につけた知識・技能を「何のために活かすのか」という学びがもっと学校の特色・取組の中から見えてくれれば、商業高校という枠としてだけではなく、全国的な高等学校の中で、山形市立商業高等学校としてのブランド力が上がっていいくのではないか。

それには、まさに地域にあふれる商材を知ることとも繋がる STEAM（スティーム）教育などの創造性・問題解決能力の重要性も高まっていくと考える。

動向の激しい社会の中で、教科書の視点だけではない、今の商業に即した最新の思考の手法は必須である。

またコロナ禍や自然災害の頻発、少子高齢化などで、より社会に求められる事業継承や BCP（事業継続計画）などの基本的知識の習得にも期待している。

ある「高校生活実態調査」では、IT・エンジニア系に続き、自分で起業したいと考える高校生が大学生に比べても数が多いとの結果もある。

世の中に顕在化していない新しい市場を事業とするスタートアップやフリーランス・インフルエンサー等のスマートビジネスについては、働く場所が大都市圏である必要が無いなど、地元密着な商業人を育成する視点でも「起業」も山形市が商業高校を持つ意味にも繋がってくるのではないかと感じている。

私学への進学率の高さなどはより特色のある学びを求めている姿ではないか。逆に見れば、その特色を見極められる力が在学中に求められるのではないかと感じている。

大学への進学率がその後の卒業率にどう繋がっているのか、更にその先の社会との関わりはどのようにになっているのか、高校を卒業するまでの情報だけでなく、OB・OG が現在社会とどのように関わっているのかが具体的に見える化できれば、山形市立商業高等学校を選んで学業に邁進する生徒が一層増えるのではないかと感じている。

起業家精神を養う教育という点においては、経済産業省等による高校での起業家教育の導入などがある。

商業高校の持つハードの強みをより活かすような起業家育成プログラムが、専門教科の課題研究などで広く生徒に実施されることも一手かもしれない。

起業家精神の中には、商売繁盛のビジネスだけの視点ではなく、社会課題解決のための起業家育成の視点を持つことも重要である。先に述べたように、社会の転換期である今、経済の動向も激しく、地域を取り巻く自然環境も大きく社会生活に影響する。だからこそ、自分の力で持続可能な地域の未来を作りだす資質が必要となる。

インバウンドへの対応など、より視点を広めるための多様な交流の中に、海外への留学や海外との人的交流の拡大を図り、視点を広げるだけでなく、そのグローバルな視点をローカルに活かす人材育成も重要となってくる。その機会の創出と、手厚い支援が必要ではないだろうか。

挑戦できる好奇心・人間的魅力・批判的思考力・社会への関与力・課題解決力など、起業家育成で学べることは大いに商業に役立つと考える。

一方で、社会が高校生の熱意を在籍した3年間に消耗・消費するだけではなく、その高校生が未来、社会人として山形に貢献できる人財になる中長期的視点を持つこと、また生徒の魅力的なメンターとしてOB・OGや地域の人材が活躍できるような環境など、学校教育だけではなくコミュニティスクールを活かした社会教育として実施することもキャリア教育の一環として効果的と感じている。

可能性としては高校生での起業ですらあり得るのではないだろうか。例えば、食堂・購買の利用促進を商業高校フードグランプリと結びつけるなど、さまざまな社会との関わりを教員だけが抱えるのではなく、OB・OGのメンターや企業とも連携して実施していくことで、実践的な学びをより多く得ることができ、面白いのではないだろうか。

山形の商業・経済を担う、また全国の商業・経済に影響を与えるられる基盤となる高校として、行政との連携や民間力なども活用し、最新の商業・経済の潮流を知ることと、同窓会を通じて、卒業生の社会参画の動向を追うなど、デジタルを利用するだけにとどまらない、デジタルを活用できる人材の育成とアナログな人情の温かみを持つ生徒となり、その生徒の自己実現が叶う、事実に基づいた戦略的な教育のイノベーションが生み出されることを期待している。

最後に部活動について、社会開放の一部として児童生徒に開放されているが、中学校の部活動の地域移行の受け入れ先としての検討なども今後進めていってほしい。

### 【伊藤委員】

先日、地主校長先生へ「商業高校の卒業生のうち、県外へ進学した方のどのくらいが山形市に戻ってきてているのか」という質問をさせてもらった。

実際そのような調査が行われてないためわからないとのことだったが、DX（デジタルトランスフォーメーション）が今後一層進んでいく中、世界に羽ばたく人材の育成も良いが、高校卒業後に、より専門的なことを学ぶため進学し、そこで得た知識を、その後地元に戻って活かしていくという道筋も、もっとたくさんあって良いと感じた。

商業高校へは頻繁に足を運び、生徒たちの学びの様子を観察しているが、やはり環境が整っているため、検定の結果なども含めレベルが上がってきてていると感じている。今後も更にデジタル化は進んでいくと思うが、是非経済産業省が本来目指している形の DX 化を意識した人材育成に取り組んでいってほしい。いま世の中では、労働者不足に伴う業務の効率化や、安全性の向上などを目指し、デジタライゼーションが進められている。2018年に経済産業省から出された DX レポートでは、もし日本がこのまま DX 化を進めていかなければ、将来的にとても大きな経済損失に繋がるという予想を発表している。

データをきちんと活用しながら、自社や顧客の課題を解決し、新しいビジネスモデルの創設にも繋げていくなど、先を見据えて動くことのできる人材の育成というものが、これからの中を生きていく若い世代には求められるスキルであろう。こうした意味でも山形市立商業高等学校には、山形をけん引する存在として頑張ってもらいたい。そのために常日頃から意識を醸成していく必要がある。自分達が、世の中の DX 化を推し進めていくためのリーダー的な役割を担っていくという意識を、先生達から生徒達へ積極的に発信していくことによって、生徒達の動機付けにも繋がり、意識改革が行われていくのではないかと感じている。

それに加え、私の専門である心理学的な視点で言うと、リーダーシップを取るためにには、コミュニケーション力を含めた人間力が大事だと思っている。収益や競争力を高めるにあたり、客観的なデータを押し付けるように説明するのではなく、そのデータをわかりやすく分析し、仲間に上手くプレゼンできるという力がとても重要になってくるであろうと考えている。

私もそうであるが、年齢が上の方になってくると、DX 化というものの自体とてもハードルが高いものというイメージがあり、抵抗がある。経営者の中にはあまりそういう方はいないかも知れないが、現場で働く従業員の中には一定数そうした方が存在する。そのような人達とも上手にコミュニケーションを取り、理解してもらい、行動してもらうためには、やはり好感度やプレゼン能力といった人間力が求められてくる。更に、社会動向が激しい今、変革をし続けるということ也非常に重要であり、レジリエンスを高く持つことや、課題解決に向け学び続ける力も必要である。このような資質を持った人材の育成を、高校の教育の中で一層推し進めてもらいたい。

そのほか、人材という点で言うと、やはり山形に愛着を持って戻ってきて、地域に貢献してくれるような人材を増やす仕組みを作れないものかと考えている。私事ではあるが、県外に就職していた次男が、山形で就職することを決めて先月戻ってきた。私も県外から山形に入ってきた人間ではあるが、私の時代にはこれまで築き上げてきた様々な人間関係を絶って来なければならず、ものすごい喪失感があった。しかし、この1ヶ月近く息子を見ていると、昔と変わらない人間関係が続いていることに時代を感じた。

いまの若者はどこに住んでいようが普通に友達同士 SNS で繋がっており、何かあれば東京にもすぐに出かけて行ってしまうなど、フットワークが非常に軽い。こうした様子を見ていると、山形に帰ってきて落ち着いてしまうというものではなく、繋がりを強固にしていきながら山形の発展に貢献していくことが可能となっている。

そうした意味では、先程市長からのお話にもあったように、地域を知らずに県外へ出ていってしまう若者が多いのはもったいないことであり、地域の文化や企業の魅力について知識と繋がりを若いうちから持つておくということは重要なと考える。同窓会などと地元企業が上手く連携し、県内外にいる同窓生達にインターンシップの情報を発信したり、就職への勧誘ルート的なものが構築されたりすれば、若者が地元で生き生きと仕事をして活躍するというケースが増えてくるのではないかと感じた。是非商業高校で検討していただきたいと思い、提案として述べさせてもらった。

### 【金沢教育長】

私が中学校の教員をしていた時の話になるが、高校受験に向けて生徒達の話を聞いていると、商業高校を受けたいという生徒は、ほとんどが商業高校を第一志望にしていたと思う。これは自分の成績を見ながら最終的に入学できそうな学校を選択するという普通科志望の生徒とは明らかに違っていた。つまり、商業高校を選ぶ生徒達は、最初から何かしらの期待や夢を持って入ろうとしていたということを、いま改めて実感しているところである。

生徒たちのそのような動機は、商業高校にあっても学校経営面であったり、教育活動を実施するにあたって非常にプラスに働いていると思う。実際、教育長という立場になってからも度々商業高校へ足を運んでいるが、生徒達からはハツラツとしたエネルギーを感じ、とても元気が良い。非常勤講師をしている先生などからも話を聞く機会があり、ここの生徒達は面白く、ずっとここで働き続けたいと熱く語られていたのがとても印象的だった。これが、商業高校の実態なのだと思う。

県内の公立高校の倍率が年々下降気味である中、商業高校は新しい設備という魅力も相まって、県内屈指の人気校となっており、設置者である山形市を含め、産業経済界から、大きな期待が寄せられている。

さて、先程の地主校長先生からの説明の中で、商業高校のスクールミッションが「県内商業教育の中核校として、実践的・協働的で質の高い教育活動を行うことを通して、ビジネスパーソンとして必要な知識や技術を身につけ、持続可能な社会や地域産業の発展を目指し、貢献する人材の育成」とあった。県内の商業高校は、山形と米沢の2校だけであるが、米沢商業高校は来年度から米沢工業高校と統合なる予定だ。それ以外にも商業科がある学校は県内に5校あり、全部で7校が商業教育に携わっていることとなるが、山形市立商業高等学校には、山形県の商業教育をリードする中核校として、教育の質の更なる向上に向け取り組んでいってもらいたい。

そこで大事なことは、やはり学校全体の雰囲気であったり、生徒をやる気にさせる先生方の気概なのだと思う。とある調査によると、都道府県別の社長輩出率で山形県は全国第2位であった。当然会社の規模は大小様々あるだろうが、それでも山形県内、そして山形市内には、前に向かい起業しようとする方が多くいらっしゃる。そうした意味でも、商業高校には将来の地域経済を担うリーダーの育成という役割があり、そこに向けしっかりと学校経営や生徒の育成に力を注いでいく必要があると感じている。

続いて、今年度の重点と今後に向けてということで、地主校長先生から説明のあったとおり、商業高校では新校舎での学びが始まった令和4年度から単位制を導入しており、今年度は新たに総合ビジネス・経済・情報の3科体制で動き出している。新校舎が完成してからというもの、全国から多くの視察を受け入れているが、充実した施設設備面も含め、教育環境の素晴らしいに皆驚かれ、その噂が全国にも知れ渡っているところである。こうした中、この度学科体制も固まつたわけなので、これからは施設設備面の素晴らしい以上に、その中身が問われてくることとなる。中身を問うというのは、教育の成果、つまり、生徒達にどのような成長変化を生み出すことができているのか、ということになってくるだろう。商業高校では成果検証の項目として、「チーム・ティーチング等適正な指導体制の構築、学力の向上、各種検定の上位級合格者数の増、進路希望の実現、社会人としての資質・能力の育成」を挙げているが、このことを先生方一人ひとりがしっかりと意識して生徒達に関わっていくことがとても重要である。

夢と希望と憧れを持って入学してきた生徒達に対し、先生方がどう関わり、どう生徒達の力を伸ばし、どう成長させ、そしてどのような形で卒業させるのかということをしっかりと意識して関わること。これは高校に限った話ではないが、学校としての一番の使命であり、責務であると私は考えている。

山形市立商業高等学校には、商業高校という特徴を活かしながらも、生徒達の実態に応じ、カリキュラムや指導体制等の改善を積み重ね、今後ますます充実した教育が実施されていくことを切に願う。

最後に、商業高校の学校運営協議会について感じたことを申し上げたい。一般的に、学校というものはどちらかと言うと内側に閉じてしまい、外部の意見は取り込まれづらい傾向がある。こうした状況を開拓するために、国も学校運営協議会制度を作り、各自治体ではその制度を活用して、社会に開かれた教育課程を目指しているところである。

こうした視点で見てみると、商業高校の学校運営協議会には山形の経済・産業界をけん引するバラエティに富んだ素晴らしいメンバーが揃っており、更にこれだけの方々から年に3回も集まつてもらい、商業高校の学校運営について話し合っていただいくというのは、先生方にとっても非常に貴重な時間であると感じている。特に、山形市立商業高等学校は市立ということもあり、人事関係等も県立高校と違う部分が多いため、先生方も苦労されていることが多い。こうした中で、学校運営協議会をおし外部の方々から忌憚のないご意見を頂戴することは、先生方の意識改革という面においても大きな役割を果たしているのではないだろうか。学校運営協議会の委員の皆様からは、今後とも貴重なご意見や先進的な知見をどんどん学校や先生方にお伝えいただき、それを起爆剤に商業高校がますます魅力あふれる学校へと発展していくことを期待したい。

### 【佐藤市長】

皆様から思いの強いご意見をたくさん頂戴し、改めて商業高校への期待の高さを感じたところである。

こうした中、2点ほど気になることがあった。一つ目は、商業高校から地元の山形大学へ進学する生徒数の少なさである。この点については、是非山形大学側とも意見交換を行いながら、分析をしてもらいたい。

次に大学へ進学した生徒たちのその後の進路について、現状追えていないという点も気になった。SNSを活用する等して、一度外へ出ていってしまった卒業生も学校の運営と繋がることができるような仕組み作りができれば良いと感じたところである。

ほかに意見等はないか。

〈意見等なし〉

今日は非常に貴重な意見をたくさんいただいた。

今後は頂戴した意見を踏まえながら、すぐに取り組めるものはすぐに着手し、より良い学校運営を進めていっていただきたい。

**4 その他** (西村教育企画課長)

今年度の総合教育会議の持ち方については、昨年度同様、年2回の開催を考えている。第2回目については、令和7年2月上旬頃を予定している。具体的な内容については、今後協議して決定していきたい。

**5 閉 会** (西村教育企画課長)